

ころく まき 小六の楨

むかしむかし、織田信長や豊臣秀吉が育つた、戦国時代中ごろのお話です。尾張の国飛保村（江南市前飛保）に、日輪山曼荼羅寺という山内十三院を持つ大きなお寺がありました。その一つに寺子屋「梅陽軒」（本誓院）があり、そこに小六という大へんわんぱく童子がおりました。

小六の父は一里（四キロ）ほど東にあたる、稲木庄宮後村（江南市宮後）に住んでいた蜂須賀彦右衛門正勝（幼名小六）で、和尚さまを見込んで、立派な大人になるようあずけられていたのです。

小六のわんぱくは近在でも評判でした。手習いするときなど机にらくがきはするし、小刀で傷はつ

けるし、また外へ出ると、子分をしたがえ戦争ごつこをして山内や近くの山林を走りまわり、たえず生傷がたえませんでした。でも和尚さまは、小六を大きな人間に育てるため、よほどのことがないかぎり叱つたりはなさいませんでした。

こんな小六が十一歳（四年生）の夏の夕ぐれどきのことです。まだあたりは明るく蝉が鳴いておりました。どこで拾ってきたのかきたならしい小さな甕を大切そうに抱きかかえ、山門を入ってきました。

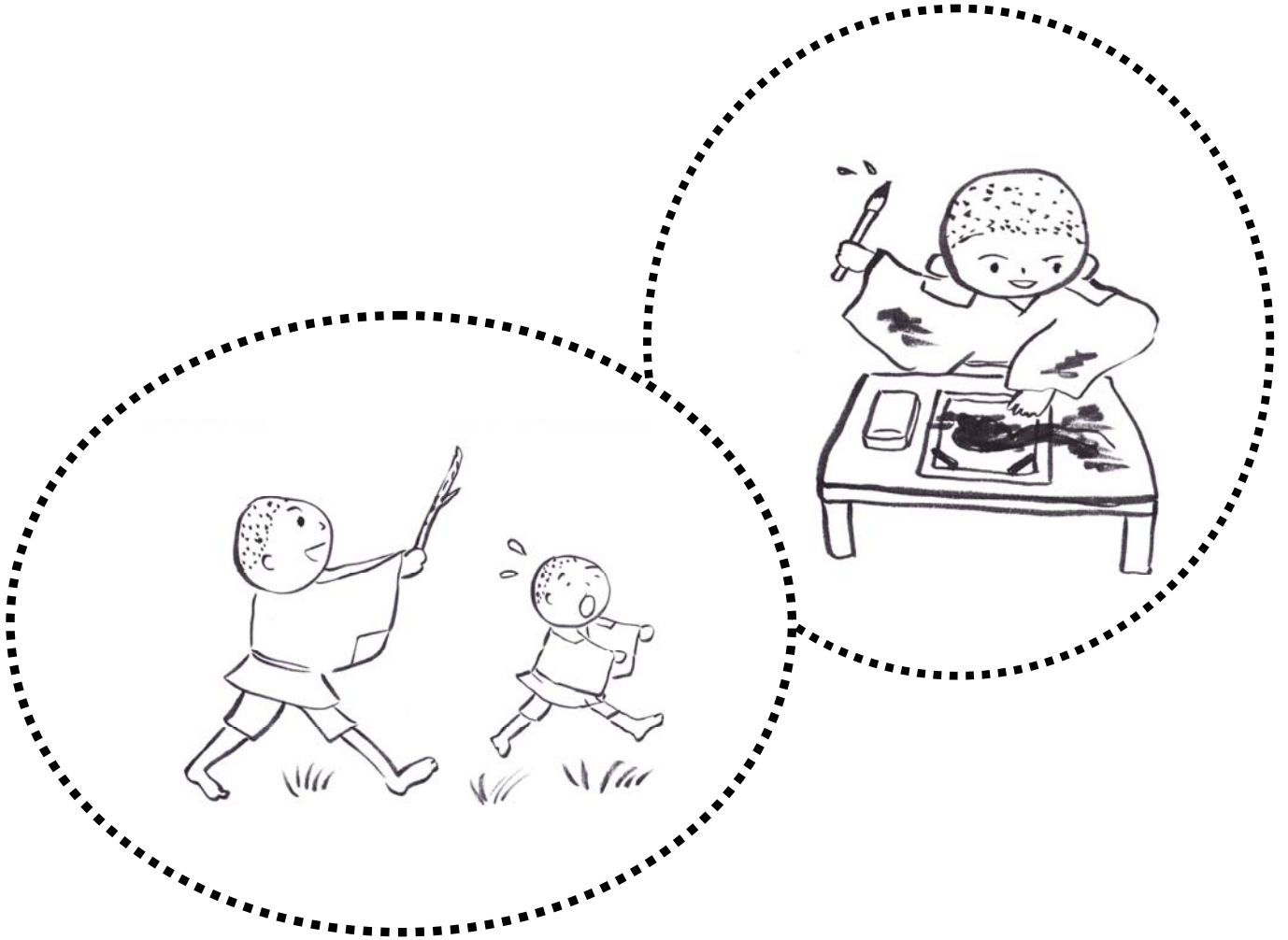
和尚さまが

「これこれ小六、それはなんじゃ」

と尋ねられると、少しとくいげな顔をして

「和尚さま、見てちよー」

甕を目の前にさしだしました。中をのぞかれると、かぶと虫やくわがたが五・六匹かさなりながら入っ



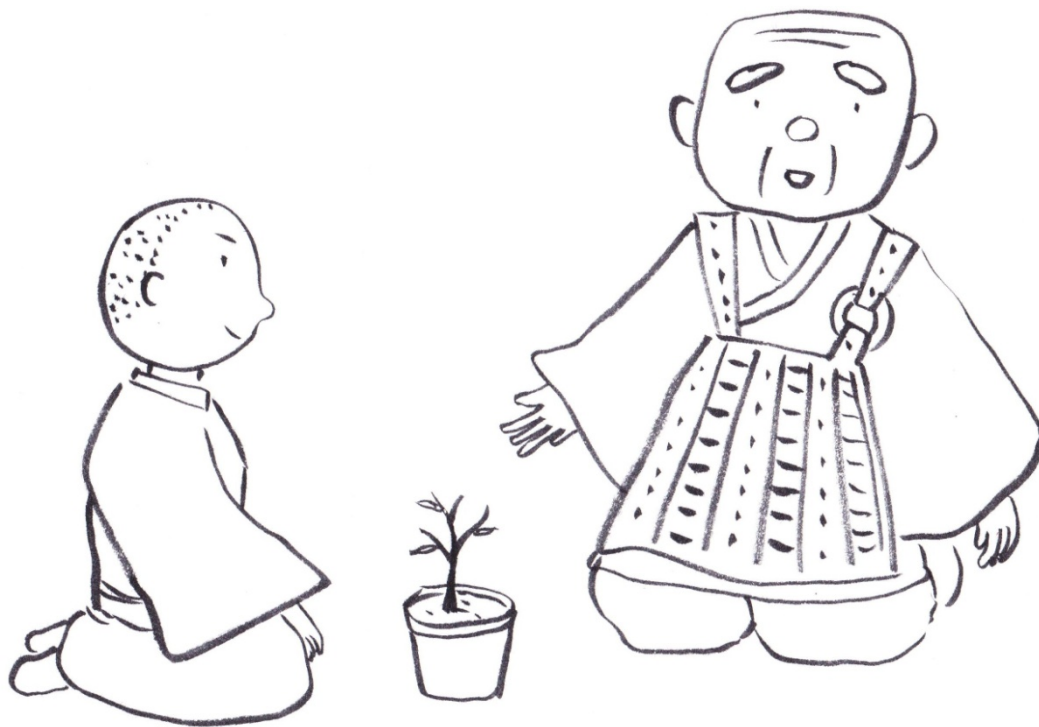
ております。それから二日ほどの小六は、その甕かめを
 宝たからのように持ち歩いておりましたが、三日目のこ
 とです。例れいの甕かめが、庭先にわさきにころがつているのを見みら
 れた和尚おしょうさまは、小六ころくを呼よんで
 「虫むしどもをどうしたんだ」

そう聞きかれると

「もとの木きのおうちへ返かえしたー」
 と言いいながら、門もんの外そとへ飛たび出だしていきました。

お正月しょうがつも過すぎて、小六ころくも十二歳じゅうにさいになりました。
 和尚おしょうさまは「寒かんごり」といって、寒中かんちゅうに頭あたまから水みず
 をかぶる修行しゆぎようがならわしでしたので、朝早あさはやくから
 起おき、小六ころくも起おこして

「わしはこれから水みずをかぶる。どうだお前まえもやっ
 てるか」



凍りついた夜明けのことです。少しむりかと思われ
 ましたが尋ねると、元気一ぱい

「私もやりまゝす」

さつさと井戸屋形の方へ行き、水を汲み、二人並
 んで寒ごりを始めました。終ったあと、和尚さまの
 よろこびは、一通りではなかったようです。

三月の吉日。小六は親元へ帰る日がきました。和
 尚さまの方が朝から落ちつかないようすでしたが、
 小六を本堂の正面に座らせると、昨夜から用意し
 ておいた、墨で書いた白い長い紙を見せ、声高らか
 に「眞ヲ以ツテ大木ニナレ」

と文字を読み上げられました。そして一本の槇の
 苗木をわたし

「槇と言う字は木へんに眞と書く。お前にふさわ
 しい木じゃ。記念に植えていくがいい」

こう話はなされると佛前ぶつぜんに座すわり、お
ごそかに読経どきようを始はじめられました。

のち ころく 後に小六あわいつくは、阿波一國とくしまけん（徳島県）
とくしまじようしゆ はちすかいえまさころく
の徳島城主・蜂須賀家政公として
りようみん 領民からしたわれましたが、その
ときう 時植えられた榎まきは、やがて大木たいぼくと
なり、"小六の榎"として最近さいきんま
で親したしまれてきました。しかし、
しやうわよんじゆうくねん 昭和四十九年、どうしたことが枯か
れてしまい、切きられる運命うんめいとなり
ました。今いまはその根ねっ子こだけが、
ほんせいじん もん よこ 本誓院の門の横に、ありし日の面
かげ 影をしのばせております。

このお話はなしは、史実しじつをもとに創作そうさくしたものです。

